

名寄市と連携した保育・子育て支援事業 ～2022年度 子育て支援実践報告と学生スタッフへのインタビュー～

著者	奥村 香澄, 傳馬 淳一郎, 瀬野 友寛
雑誌名	地域と住民 : コミュニティケア教育研究センター年報
号	7
ページ	67-70
発行年	2023-05-31
出版者	名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター
ISSN	0288-4917
書誌レコードID	AN0001106X
URL	http://id.nii.ac.jp/1088/00001949/



実践報告

名寄市と連携した保育・子育て支援事業
 ~2022年度 子育て支援実践報告と学生スタッフへのインタビュー~

奥村香澄¹⁾* 傳馬淳一郎¹⁾ 瀬野友寛²⁾

¹⁾ 名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科 ²⁾ 名寄市健康福祉部こども・高齢者支援室こども未来課

キーワード：模擬保育室 子育て支援 学生スタッフ

1. はじめに

今日、保育のニーズが多様化する中で、保育における子育て支援の役割が強調されている。そこで、2021年度より、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター課題研究として「名寄市と連携した保育・子育て支援事業」として、模擬保育室を活用した子育て支援を展開している(傳馬・奥村・西村 2022)。

2. 2022年度 活動状況

事業内容

名寄市地域子育て支援センター ひまわりらんど in 名寄市立大学

開催場所：名寄市立大学3号館1階模擬保育室

開催日：2022年6月11日(土)より 毎月第2・第4土曜日

時間：10:00~11:30(スタッフ準備等含む、模擬保育室利用時間8:30~12:30)

参加人数：未就学児とその保護者 15組程度(事前予約)

活動内容：遊びの広場として「親子の交流」「保育士等による相談」「学生のサポート」など

表1. 子育て支援開催日と参加人数(親子、学生スタッフ、参加者の構成)

	開催日	親子組数 参加人数	学生スタッフ数	参加者の構成
6月	11日	8組 23名	3名	母8名、父1名
7月	9日	7組 21名	4名	母13名、父3名
	23日	6組 14名	2名	
8月	27日	8組 19名	0名	母6名、父3名、祖母1名
9月	10日	8組 20名	1名	母15名、父3名
	24日	7組 17名	1名	
10月	8日	9組 20名	1名	母18名、父3名
	22日	10組 25名	1名	
11月	12日	12組 32名	3名	母31名、父9名
	26日	10組 27名	0名	
12月	10日	10組 27名	4名	母16名、父7名
	24日	6組 18名	2名	
1月	28日	14組 33名	2名	母13名、父6名
3月	11日	12組 30名	0名	母21名、父7名
	25日	10組 23名	2名	
合計 (延べ)	15回 開催	137組 349名	26名	母141名、父42名、 祖母1名

*責任著者 E-mail:kokumura@nayoro.ac.jp

2022年度は、感染症の流行等の影響も受けながらも、前年度よりも継続的な開催が可能となった。一方で、夏場の事前予約数が少なくなる傾向が見られた。これは、行動制限の緩和に伴い、子育て家庭の週末の外出が増えてきていることが影響していると考えられる。そうした傾向は、降雪により親子で気軽に遊びに行く場所が減る冬季期間に予約数が増えることから見て取れる。北海道の雪深い地域の子育て家庭にとって、気軽に遊びに行く場所が十分とはいえない現状を反映していると考えられる。



写真1 学生スタッフと親子

学生スタッフの参加は、実習時期には少なくなる



写真2 演習学生と子ども

が、継続的に子育て支援に入ることで、保育学生としての変容が期待される。本学の学生は、子育て支援に関する演習科目を2年次に受講している。旧短大児童学科から保健福祉学部社会保育学科に移行する際、独自科目として「家庭支援実践演習」を新たに設け、4年制保育者養成に子育て支援を位置づけ、授業を展開してきた。この演習科目は、市内の子育て支援センターに3度訪問する中で、子育て中の保護者の声、親子関係の様子、子育て支援の場における保育士の役割等々を学ぶことができ履修希望学生も多い。この演習科目を修得した学生を対象に、スタッフを募り、模擬保育室での子育て支援を行う名寄市保育士の補助として継続的に参画している。

3. 学生スタッフへのグループインタビュー

本稿では、子育て支援スタッフ（以下、スタッフ）としてひまわりらんど in 名寄市立大学（以下、子育て支援）に関わった学生へのグループインタビューを通して、保育士養成課程の学生にとっての子育て支援センターの役割やその意義についての報告を行う。

1) 方法

(1) グループインタビュー

スタッフとして子育て支援に関わった2名を対象とした。2年次に「家庭支援実践演習」を受講した学生が子育て支援にて有償スタッフとして保育補助を行った。グループインタビューの実施時期は、20xx年x月であり、全部で1時間程度のグループインタビューであった。

(2) 質問項目

質問項目として、スタッフとして関わった感想、子育て支援センターのイメージの変化、保育学生として生かせること、保護者との関係、お父さんのイメージ、コロナ禍における子育て支援センター、利用者への関わり方の変化等について触れた。

2) 結果

インタビュー内容として特筆すべき発言を表2に示した。

5つの項目以外においても、子育て支援を大学で行うことの意義について、複数の場面で触れられた。例えば、「ひまわりらんどと模擬保育室では環境がちがう。あるおもちゃ、広さ、雰囲気も全然違う。学生がアルバイトで入るってことは、毎回同じ人がはいるわけではない。(略)自分も人との関わりで成長してきたから、子ども達にとっても、(略)いろんな人に関わる、いろんな場所に行く経験はすごくいいのではと思った。」などの発言があった。

表2. グループインタビューの発言内容の一例

子育て支援センターのイメージの変容	<ul style="list-style-type: none"> ・はじめて入る前は、保育士さんが主体っていうか、それこそ、子育てに行き詰った人たちがくるので、保育士さんがどうにかしてあげるイメージ。子どもにとってはただ遊ぶという場所。実際に入ってみると、保育士さんが主体ではなく、見守る。メインは保護者さんと子ども。本当に困っているような人には保育士さんが話しかけるけど、主体が自分の思っていたのは違った。 ・悩みを抱えた保護者さんが来て、子どもは自由に遊んで、保護者さんは保育士さんに相談に来るようなイメージだった。そこまでお悩み相談っていうわけではなく、子どもと楽しく普段とは違う環境で遊ぶ、保護者さんどうして話をする、という結構明確なイメージ。どんよりしていなかった。
コロナ禍における子育て支援センターの在り方	<ul style="list-style-type: none"> ・いつでも予約とかじゃなくて、ふらっと来れる、もともとの形ってそうだなってわすれてたんですけど、完全予約制で、時間も決まってて、時間が短くてかわいそうだなとも感じる。10時にきて、11時にかえるっていう基本だったら、帰りづらそうってわけではないけど、そういうルールがあるなかで、11時前に遊びを切り上げてかえる、というのは例外に見える。 ・距離をとるためのマットだと思うんですけど、本来ならそれがないほうが保護者さんどうしが関わりやすい。その反面、一人でじっくり子どもと遊びたい保護者もいると思うけど、マットがないほうがいいんじゃないかな、と思う。
子育て支援センターのあるべき姿	<ul style="list-style-type: none"> ・保育所とか幼稚園とは違う。保育士さんは場所を提供しているということが強い。それだけではないけど、場所を提供する雰囲気を提供するということに意義があるかな。 ・時間に縛られずに、行きたいときに帰りたいときにフラットな感じで立ち寄れる場所。あまり時間の制限がないっていうのが大事なのかな。
実習との結びつき	<ul style="list-style-type: none"> ・たとえば、お子さん何歳ですか？ってお子さんの年齢がわかったら、保育実習で私は全クラスに入って、各年齢でできることややりはじめることが、やっぱりちょっと理解できたので、実際に見たら、やっぱりこういう遊びが好きなんだというイメージ、発達が結びつきやすかった。
子どもへの関わり方	<ul style="list-style-type: none"> ・基本親子の関わり方の様子を見て、必ずしも自分がどこかにいなければならぬ、というのではない。楽しそうに遊んでいるから入らなくていいとか、逆に持て余してたら、そこに入ることもある。きょうだいで来てたら、行くとか。回数を重ねるごとに、いて判断、瞬時にできるようになった。最初はできなかった。状況が変わるから。

3) 考察

1年間、授業ではなく、スタッフとして子育て支援にかかわった結果、子どもへの関わり方のきっかけのを見つけ方、実習に生かすことのできる経験が得られるといった発言も多く見られた。今回、グループインタビューを行った学生は3年次であったことから、スタッフとして子育て支援センターに関わりながら、保育所、幼稚園、施設実習を経験することによって、それぞれの施設の役割や保育者としての保護者や子どもへの関わり方の違いについても、体験を通して学ぶことができたといえる。

今後の課題として、安定したスタッフの確保、スタッフと子育て支援センターの保育士との連携が挙げられている。昨年度同様、今年度も新型コロナウイルスに対する感染予防対策を重視した中での子育て支援事業であったため、通常の子育て支援センターとしての役割が不明瞭になってしまうなどの問題点についての気づきもあったと考えられる。次年度以降、感染症対策を行う中でも、より本来の形に近い子育て支援センターとしての機能を充実させるような取り組みが求められるといえる。

4. おわりに

本事業は、名寄市と連携した保育・子育て支援事業2年目の実践報告である。グループインタビューからは、学生スタッフの安定的な確保という課題はあるが、保育学生にとって貴重な学びの場となっていることが確認された。次年度以降も模擬保育室を活用した子育て支援は、名寄市子育て支援センターが中心となり、大学と連携して事業を継続する。今後は、参加する親子にとって大学での子育て支援が、どのような役割を果たしているのかにも着目しながら実践を継続していきたい。



写真3 学生スタッフと親子

謝辞

本事業にご協力くださった名寄市子育て支援センター保育士の皆さま、学内関係者の皆さま、またグループインタビューに協力して頂いた学生スタッフに心より御礼を申し上げます。

付記

本稿は、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター2022年度課題研究の採択を受けたものである。

文献

傳馬淳一郎、奥村香澄、西村宣幸(2022) 名寄市と連携した保育・子育て支援事業～2021年度 模擬保育室を活用した子育て支援 実践報告～、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター『年報』第6号(通巻40号)、pp.65-70.